

■ 平成9年度事業概要 ■

I 文学資料の収集・整理・保存及び閲覧事業

寄附行為第4条第1号に掲げる事業は、次のとおり行った。

- 寄贈資料受入れ総数(図書・雑誌及び特別資料) 2,455点
- 購入図書・雑誌 1,658点
- その他の購入特別資料 95点
- レプリカ作成・VTR、テープ 14点

(別掲の統計・資料編「資料収集状況」欄参照)

整理・保存 カード作成及び寄贈・寄託目録等作成
閲 覧 利用者 延べ3,643人

II 文学に関する展覧会・文芸講演会等の開催事業

寄附行為第4条第2号に掲げる事業は、次のとおり行った。

1 展覧会事業

- (1) 常設展 「北海道文学の流れ」
会 期 通年(289日間)
会 場 北海道立文学館常設展示室
入場者 10,752人

展示の構成・内容は、開館当時のものを踏襲しつつ、展示資料とキャプションの部分的な変更を行った。以下に、展示編成の基本を掲げておく。なお、〔 〕内は監修者名を示す。

〈札幌農学校と有島武郎〉〔高山亮二〕

このコーナーでは、ウィリアム・S・クラークの事蹟によって広く知られている札幌農学校(現、北海道大学。明治9年開校)の存在と活動を紹介するとともに、その農学校に学び、のちに母校の教壇に立って多くの後進を育成し、文学者・思想家として日本近代史に刻まれる仕事を残した有島武郎について、内村鑑三、新渡戸稲造、森本厚吉、ティルダ・ヘックらとの交流を含め、通算12年間にわたる本道在任期の足跡を概観した。

〈北海道文学の流れ—明治・大正期〉〔木原直彦〕

このコーナーで取り上げた主な文学者・関連人物名、事項名は次のとおりである(以下同)。

* 「空知川の岸边」国木田独歩

国木田独歩、佐々城信子

* 開拓期を彩る作家群

岩野泡鳴、幸田露伴、長田幹彦、島崎藤村、葛西善蔵、徳富蘆花ほか

* 漂泊の人・石川啄木

石川啄木、石川節子、橘智恵子、野口雨情ほか

* 有島武郎をめぐる人々

有島武郎、有島生馬、里見弴、武者小路実篤、志賀直哉

* 道産子作家誕生

武林無想庵、岡田三郎、森田たま、中戸川吉二、中村武羅夫、子母沢寛、素木しづ、長谷川海太郎

* 同人雑誌群

「路上」「路傍人」「君影草」「白夜」「歩み」ほか

* 来道作家の足跡（大正期）

文学地図（足跡図）—吉屋信子、宮本百合子、橘外男、宮沢賢治、宇野千代、長田幹彦、久米正雄ほか

〈北海道文学の流れ—昭和前期〉〔西村信〕

* プロレタリア文学の潮流

葉山嘉樹、小林多喜二、久保栄、小熊秀雄、島木健作、本庄陸男ほか

* 若い詩人の肖像

伊藤整、川崎昇ほか

* 来道作家の足跡（昭和前期）

芥川龍之介、里見弴、鶴田知也ほか

* 農民文学の世界

吉田十四雄、辻村もと子、板東三百、早川三代治、坂本直行ほか

* 戦時下の文学

林容一郎、中津川俊六、八木義徳、寒川光太郎ほか

〈北海道文学の流れ—昭和後期〉〔神谷忠孝〕

* 戦後文学の展開

風巻景次郎、武田泰淳、宇野親美、中沢茂、澤田誠一、木野工ほか

* さまざまな座標Ⅰ

船山馨、亀井勝一郎、八木義徳、和田芳恵、長谷川四郎、李恢成、重兼芳子、高橋揆一郎、小檜山博ほか

* 旋風をおこした作家たち

原田康子、三浦綾子、渡辺淳一

* さまざまな座標Ⅱ

荒巻義雄、藤堂志津子、佐藤泰志、川又千秋、佐々木譲、土居良一ほか

* 来道作家の足跡（昭和後期）

福永武彦、戸川幸夫、新田次郎、水上勉、開高健、大江健三郎ほか

* 活躍する作家たち

三浦清広、加藤幸子、沖藤典子、久間十義、見延典子、辻仁成、谷村志穂

〈北海道の詩〉〔永井浩〕

* 草創期

児玉花外、高村光太郎、三木露風、宮沢賢治、北原白秋

* 生成期

更科源蔵、吉田一穂、左川ちか、猪狩満直、鈴木政輝、加藤愛夫、和田徹三ほか

* 戦争と詩

百田宗治、今井鴻象、鷺巣繁男、三谷木の実、牧章造ほか

〈北海道の短歌〉〔田村哲三〕

* 北海道歌壇の動き

山下秀之助、酒井広治、小田観螢、中城ふみ子ほか

* 来道歌人

斎藤茂吉、与謝野寛、与謝野晶子、斎藤史、宮柊二ほか

* 口語短歌

鳴海要吉、石川啄木ほか

* アイヌの歌人

バチラー八重子、違星北斗、森竹竹市ほか

〈北海道の俳句〉〔木村敏男〕

* 北方俳句の夜明け

松窓乙二、河東碧梧桐、牛島藤六、高浜虚子、長谷川零餘子、臼田垂浪、石田雨圃子、青木郭公ほか

* 俳句近代化への潮流

荻原井泉水、泉天郎、長谷部虎杖子、唐笠何蝶、細谷源二、土岐鍊太郎、伊藤凍魚、水野波陣洞ほか

* 花ひらく北の俳句

斎藤玄、寺田京子、比良暮雪、佐々木丁冬ほか

* 俳句の現代

比良暮雪、佐々木丁冬、鮫島交魚子、園田夢蒼花、山岸巨狼ほか

〈アイヌの口承文芸〉〔藤本英夫〕

金田一京助、知里真志保、久保寺逸彦、金成マツ、知里幸恵、萱野茂

〈北海道の川柳〉〔斎藤大雄〕

* 明治～昭和前期

鈴木青柳、北村白眼子、亀井花童子、神尾三休、三輪破魔杖、井上剣花坊、鶴彬、西嶋〇丸、田中五呂八ほか

* 昭和後期～平成7年

西村欣童、高木夢二郎、森田一二、甲野狂水、古田八白子

* 北海道の川柳社

道央、道南、道東、道北の各結社の活動と結社誌等を紹介。

〈北海道の児童文学〉〔柴村紀代〕

* 明治～昭和20年代

伊東音次郎、支部沈黙、坪松一郎ほか

* 昭和30年代

石森延男、神沢利子、安藤美紀夫、渡辺ひろし、玉川雄介ほか

* 昭和40年代以降

加藤多一、後藤竜二、長野京子ほか

〈千島・樺太の文学〉〔木原直彦〕

夏堀正元、吉村昭、李恢成、寒川光太郎ほか

(2) 特別企画展

●「森田たまと素木しづーしなやかに煌めく感性のかたち」

会 期 平成9年4月29日(火)～6月8日(日) (37日間)

会 場 北海道立文学館特別展示室

入場者 1,465人

森田たま(1894～1970年)の展示は「石狩少女」「片瀬まで」「もめん随筆」「随筆ゆく道」「ゆき」の5つのコーナーを中心に構成。そのほかに、「愛用品」「全著書」「宛書簡」「自筆イラスト」などを配し紹介した。『幸福の銀貨』の装幀に関する自分の意見を記した自筆原稿や、出版契約書、書画、色紙、短冊、遺品の数々により、森田たまの小説家をめざして苦悩した時代、随筆家として活躍した時代を表現した。

素木しづ(1895～1918年)は22歳で夭折した作家だが、大正初期に新進の女流作家として脚光を浴びた。残された著書も少なく、現在ではほとんど読むことは出来ないこの作家の展示では、「青白き夢」「たそがれの家



の人々」「美しき牢獄」「小さき命」の4つのコーナーで構成し、しづの作品掲載誌を中心に、短い執筆期間ながらも病気と貧しさの中で書き続けた生涯を紹介した。そのほかに、夫で北海道出身の画家上野山清貢の油彩画等も展示した。

別に作成した図録では森田たまの「片瀬まで」(大正2年9月「新世紀」)と素木しづの「美しき牢獄」(大正6年3月28日～8月2日、読売新聞)を全文収録し、好評を得た。

●「青春と文学」

会 期 平成9年9月27日(土)～11月7日(金) (34日間)

会 場 北海道立文学館特別展示室

入場者 1,444人

特別企画展「青春と文学」は、時を超えて展開されてきた十代の若者達の文芸活動の歩みをたどり、その実状を広く紹介することを目的に、大きく次の3つのコーナーに分けて展示した。

第1のコーナーでは、昨年まで34回を数えている有島青少年文芸賞の受賞者・入賞者全員をパネルで紹介するとともに、そこから巣立った主な作家として、佐藤泰志、澤井繁男、見延典子の3氏を紹介した。また、大正期から現在までの学校文芸誌の足跡や現在活動している高校文芸誌の分布地図、発刊されている文芸誌等も展示した。



第2のコーナーでは、学校卒業後に文学者となった人々の学校文芸誌活動を紹介した。大正期に北海中学（現・北海高校）に学んだ子母沢寛や島木健作から、現在活動中の人々まで21名。そのほかに、異分野で活躍した人々の学校文芸誌活動も併せて紹介した。

第3のコーナーでは、平成元年に創設された有島武郎青少年公募絵画展の受賞作品を展示。有島武郎賞を受賞した9作品をはじめ、今年の各受賞作品20点も展示し、創作活動に取り組む中学生・高校生の姿を広く紹介した。



会期中、いくつもの高校の文芸部の担当教師が、文芸部員を連れて文学館に足をはこんでくれるなど、通常の特別企画展とは異なり、若い人々の姿が数多く見られた。

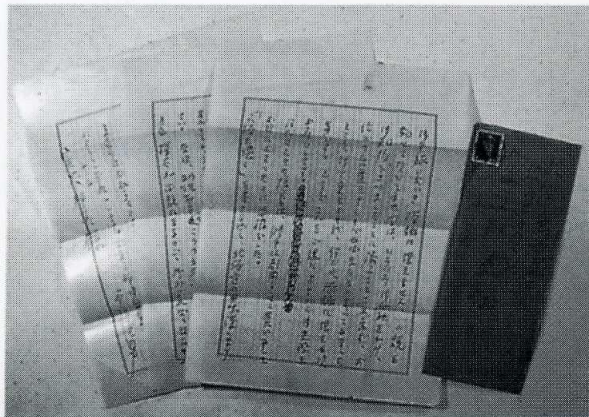
●「書簡に探る作家の素顔」(所蔵品展)

会 期 平成10年1月17日(土)～3月8日(日) (43日間)
 会 場 北海道立文学館特別展示室
 入場者 784人

本展では、道立文学館や財団法人北海道文学館が収集してきた書簡類の中から、47点の文学に関わる人々の手紙と葉書を、解説をまじえて展示した。

明治期の有島武郎、新渡戸稲造、武者小路実篤、大正期の有島、武林無想庵、昭和期の川端康成、島木健作、子母沢寛、中村武羅夫、森田たま、吉田一穂などが肉親や知友人に差し出したもので構成した。

書簡資料それぞれの内容から共通性を引き出して展示の流れの「小見出し」とし、具体的には近況を伝えたもの、旅先からのたより、作品づくりにかんするもの、礼状といった区分をした。



今回の展示を期に、それぞれの書簡資料を詳しく点検したところ、文学者の書簡集として刊行されているものに翻刻間違いが多々含まれていることが分かり、あらためてテキストクリティックの大切さを実感した。

また、本展では、今年度当館が収集した書簡数点と、本道が生んだ詩人更科源藏宛の書簡を展示した。更科宛書簡は弟子屈町の厚意により当館で公開することになったもので、中原中也、室生犀星、高村光太郎などからのものを紹介した。

(3) たんけん文学館

●「北の大地の動物たち」

会 期 平成9年7月26日(土)～8月17日(日) (20日間)
 会 場 北海道立文学館特別展示室
 入場者 2,259人



夏休み期間中に開催している「たんけん文学館」は今年で2回目を迎え、〈北の大地の動物たち〉というテーマであべ弘士著『どうぶつえんガイド』、本田哲也著『どさんこうまのふゆ』の絵本原画を中心に展示した。

あべ氏は旭川市在住。永年旭山動物園に勤務し、そのかわら絵本を書き『あらしのよる』で講談社出版文化賞、サンケイ児童出版文化賞JR賞を受賞、平成8年に動物園を退職してからも北海道に拠点を置き活動している。

本田氏は帯広市在住。北の動物をテーマに絵本を書いている。現代童画展、パリ・サロン・ド・メイ・フィナル

国際美術展で受賞。全国各地で原画展を開催している。『どさんこうまのふゆ』は英訳本も出版されている。

この2人の絵本原画43点を中心に、動物をテーマに描かれた子ども向けの絵本・漫画も展示した。

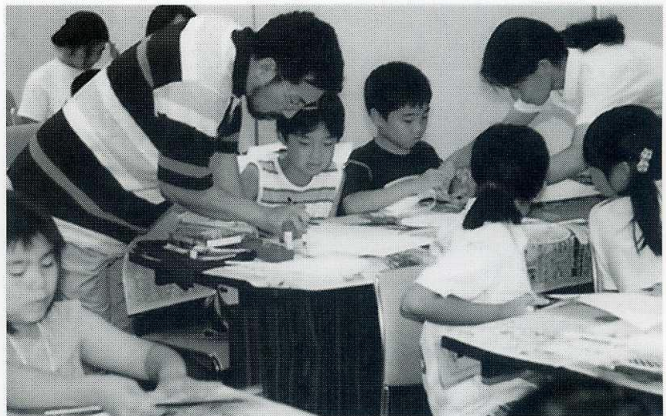
会場ではオリジナルのシールがもらえるクイズも実施し、子どもたちの好評を得た。

なお、会期中には毎日「ニルスのふしぎな旅」などのビデオ上映を行ったほか、2日間にわたって小学校低学年の児童を対象にあべ氏や学芸員の指導による「手づくりうちわ教室」を実施するとともに、あべ氏による講演会「動物絵本との出会い」も開催した。

<付帯事業>

●手づくりうちわ教室（小学生対象）

講師 あべ 弘士
 日時 平成9年7月30日
 (水)及び31日(木)
 会場 講堂
 参加者 延べ90人



●講演会

演題・講師 「動物絵本との出会い」
 (あべ弘士)
 日時 平成9年7月30日(水)
 会場 講堂
 参加者 50人

(4) ※「母と子の文学のつどいー絵本からとびだしたお友だちー」

会期 平成10年3月14日(土)～28日(土) (12日間)
 会場 特別展示室
 協力 札幌市図書館読み聞かせボランティア友の会「おはなしの森」
 入場者 1,109人

展示室では、絵本の世界に登場する人間や動物たちを中心にしたミニ展示や、手作りの大型絵本、おはなしパネル、人形なども紹介したほか、人形劇、影絵、パネルシアターなどバラエティーに富んだメニューを用意して、家族揃って楽しんでいただいた。



<付帯事業>

※人形劇等の演示

会 期	平成10年3月24日(火)~28日(土)
会 場	特別展示室及び講堂
演 目	人形劇、読み聞かせ、パネルシアター、大型紙芝居等
出 演	てんとうむし、グループゆの実、おはなしかご、ねこやなぎ、山の手図書館よみきかせの会、わらび、絵本の会どんぐり、てぶくろ、スイミー、おはなしなあに、ちいさな木
入場者	約600人

※アニメ映画上映会

期 日	平成10年3月14日(土)
会 場	北海道立文学館講堂
作 品	「トムとジェリーの大冒険」
入場者	71人

2 講演会・講座等事業 [会場はいずれも講堂、午後2時から]

(1) 文芸講演会

- 演 題 「素木しづとその生き方」
- 講 師 沖藤 典子
- 日 時 平成9年5月24日(土)
- 入場者 83人
- 演 題 「小説を書くとき」
- 講 師 見延 典子
- 日 時 平成9年10月18日(土)
- 入場者 97人

(2) 文芸セミナー

- 演 題 「風土(北海道)と文学—小熊秀雄・三浦綾子を中心に—」
- 講 師 黒古 一夫
- 日 時 平成9年7月5日
- 入場者 62人

- 演 題 「ひとの知らない草の名を一子ども、文学、音楽」
- 講 師 松居 スーザン
- 日 時 平成9年9月6日(土)
- 入場者 45人
- 演 題 「北海道の現代俳句」
- 講 師 園田夢蒼花
- 日 時 平成9年11月1日(土)
- 入場者 92人
- 演 題 「島木健作の書簡などを読む」
- 講 師 田沢 義公
- 日 時 平成10年1月24日(土)
- 入場者 25人

(3) 独自企画講演会

※平成9年5月30日(金) 辻 仁成「青春と文学を語る」

(北海道新聞社、北海道テレビと共催)

会 場 札幌パークホテル「3Fパークホール」

入場者 763人

※連続講座「有島武郎が生きた時代」

平成10年2月7日(土) 神谷 忠孝(北海道大学教授)「北海道取材作とその周辺」

聴講者 52人

平成10年2月14日(土) 中山 昭彦「大正のユートピア思想と有島武郎」

聴講者 48人

平成10年2月28日(土) 高山 亮二「『或る女のグリンプス』と大逆事件」

聴講者 65人

(以上、会場は共に北海道立文学館講堂)

(4) 映画上映

●文芸映画鑑賞会

期 日 平成9年6月21日「白痴」、28日「丹下左膳余話 百万両の壺」、11月8日「オズの魔法使い」、15日「博士の異常な愛情」の4回。(各土曜日)

会 場 講堂

入場者 述べ130人

●フィルムレクチャー「キューブリックと60年代の映像」

期 日 平成9年11月15日(土)

会 場 講堂

講 師 高橋 世織

入場者 56人

※子どものための野外アニメ鑑賞会

題名	「ドン松五郎の生活」(井上ひさし原作)
日時	平成9年7月19日(土) 午後7時30分
会場	北海道立文学館サンクンガーデン 当館近くの豊平川河畔で例年行われている「花火大会」のシーズンに合わせて夏の 一夜を家族、友人で楽しく過ごしてもらうために企画をしたものである。

III 文学に関する調査研究事業

寄附行為第4条第3号に掲げる事業は、次のとおり行った。

- 有島武郎関連資料調査(国外)
- 有島武郎関連資料調査(国内)
- 「北海道の短歌」関連資料調査
- 日本近代文学館等資料受け入れ・整理実態調査
- 特別企画展・所蔵品展の図録・リーフレット等作成、調査

IV 文学愛好団体等の活動に対する支援事業

寄附行為第4条第4号に掲げる事業は、次のとおり行った。

次の団体の事業に対して、後援名義の使用を承認して支援した。

- 大英博物館「小川東洲・書の芸術」展実行委員会(委員長・和野内崇弘)
大英博物館「小川東洲・書の芸術」展
(平成9年9月24日～同10年1月4日 英国大英博物館)
- 生田原町教育委員会・生田原町オホーツク文学館
オホーツク文学館短歌賞・同俳句賞表彰式/オホーツク文学館文学フォーラム
(平成9年10月15日、16日 生田原温泉ホテルノースキング)
- 朝日新聞北海道支社
司馬遼太郎と歩いた25年 街道を行く展/講演会
(平成9年12月2日～同14日 札幌三越/同6日 同 講師:村井重俊)
- NHK文化センター札幌支社
NHK公開セミナー「NHKスペシャル・街道を行く～司馬遼太郎の世界～」
(平成10年2月14日 札幌 かでる2・7 講師:尾崎 秀樹)

V 啓発広報事業

寄附行為第4条第5号に掲げる事業は、次のとおり行った。

- 施設案内、常設展リーフレット、各展覧会ポスター・ちらし及び講演会・セミナーちらし等を制作・発行。
 - 広報誌「サンクンガーデン」第4号(12月)及び第5号(10年3月)の編集発行
- ※「北海道文学館報」第47号(10月)の編集発行

VI 刊行物の刊行事業

寄附行為第4条第6号に掲げる事業は、次のとおり行った。

- 特別企画展「森田たまと素木しづ」図録（B 5 版 88頁）の刊行
- 特別企画展「青春と文学」図録（B 5 版 変形 26頁）の刊行
- 所蔵品展「書簡に探る作家の素顔」リーフレット（B4 版 4 頁）の刊行
- ビデオ制作

「木立のまち 札幌」（18分）の委託制作

※北海道文学ライブラリー第3集『三浦綾子ーいのちへの愛ー』の刊行

編 集 財団法人北海道文学館

発 行 北海道新聞社

部 数 4,000部

仕様等 新書判、176頁

VII 北海道立文学館の管理運営受託事業

寄附行為第4条第7号による道立文学館の管理運営は、北海道と当財団との間に交わされた委託契約に基づき、適切に行った。

VIII その他の付帯事業

※'97文学館ロビー・コンサート「詩と音楽の夕べ」

期 日 平成9年12月20日(土)

会 場 北海道立文学館談話コーナー

朗 読 野坂 政司（北海道大学教授）

演 奏 岩下光樹、奥田敏雄、鹿討 奏（以上、東京芸術大学音楽学部）

藤田朗子（ピアニスト）

来場者 45人

※古書市'97文芸お楽しみバザール

平成9年10月18日(土)、11月15日(土) 文学館地階ロビーで実施。

（チャリティー・バザール実行委員会との共催）

- （注） ● 本項中、※印の事業は財団の独自企画のものを示す。
● 文中、講師名等の敬称は省略した。